

あぶらむ通信

第32号 2010年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp



サンティアゴ巡礼の旅人
鈴木恵美子：絵

飛騨俵り

この通信はあぶらむのこの一年間のレポートです。つい先日提出したばかりと思っているのに、また新たな提出時期となりました。時の過ぎ行く早さにただただ驚くばかりです。

あぶらむ通信をお手の皆様にはお元気で過ごしのことと思います。本年も本会に多大なご支援をお寄せ下さいました事、心よりお礼申し上げます。

今年を一字で表せば“異”

あぶらむの里の敷地は約2万坪(6.6ha)ほどあり、この里の維持管理で一年が過ぎて行く。私にとっては一つのまとまった小宇宙であり、自然の変化などの定点観測にはちょうどよい大きさです。

これまで雪質の変化などゆるやかな曲線に変化して行く様を報告してきたが今年の変化は鋭角、この一年を一字で表せばまさに“異”です。

●蚊の大群の襲来

あぶらむの宿には網戸というものが無い。無いということは必要がなかったからです。40kmほど離れた同じ環境の庄川蕎麦の会の仲間が、あぶらむの里にはどうして虫がいないのかいつも不思議がる。彼らの町では夏もなれば外灯のあかりが見えなくなるほど虫が集まるといふ。ここは山だから全くいないわけではない。しかし、パラパラ程度である。そして不思議に“蚊”はめったにお目にかかれなかった。犬のジステンパーの予防注射が必要ないといわれたほどであった。

しかし、お盆前後の一番暑い2~3日、避暑にでもきたかのように羽根アリ虫や蚊がやってきた。蚊取り線香で十分だったので、網戸などどうとうしいものは必要としなかった。ところがこの夏は別ものだった。蚊の大群の襲来である。夕方6時ごろからきまったようにやってきて、7時半ごろにピタリと止む。ちょうどお客さんの夕食時で、あぶらむスタッフ総出でハエタタキを手で空中の蚊をやみくもに打つ。するとおもしろいように落ち、アツという間に小山ができる。一度数えたら二百数十もあった。ヒッチコックの「鳥」の蚊版を見るようで恐ろしくなってきた。

どうして急にこうなったのだろうか…。富山に住む甥が「今年は街には蚊はほとんどいなかった」といった。平地のあまりもの暑さに蚊も涼しいところへ大移動したのか、これが来年も続くならば何か対策を考えなければならない。果たしてどうしたものやら…。

●乾かない田

今年はどここの田も乾かないため刈り入れに苦戦したようだ。あぶらむの田も例外ではなく、こんなにきつい労働を強いられたのは始めてだった。この夏の暑さのためどこも大量の水を入れたのは確かだった。刈り入れの時の田のごちゃつきを警戒して早めに水を切ったところは米が白く実が入らなかったという。しかし水をたっぷりと当てたところは田が乾かず苦しんだ。“水稻”というだけあって稲は水が大好き、あぶらむ田は天候に関係なくこれまでも水をたっぷり当ててきた。そして例年通り9月初旬に水を切り、刈り入れまでの間25日間ほど田を干した。なのに田は乾かず、手刈りしたところもずいぶんあった。それも田に入ると

足が沈んで抜けなくなるため足場板を敷き、その上に乗って刈り取るあり様だった。また、稲刈り時は乾いていなくても、脱穀時には軽トラックが田に入るほど乾くはずなのに、今年はキャタピラをはいた脱穀機でさえ沈んでしまうあり様だった。そしてそこで大ハブニング、脱穀機が火事になってしまったのだ。タイヤならいざしらずキャタピラものまでが沈んでしまう状況に対して、脱穀と同時に細かく切断するワラを田に敷き、



いつまでも乾かない田、まるでカベ土のようだった。

少しでも地盤を固くしながら進んでいったのだが、特に地盤のやわらかいところで脱穀機が沈み、まいたワラが機械にはさまり、摩擦でワラが燃えだし、機械の油類に引火、田の真ん中で火事となってしまったのである。いやはやビックリというものではなかった。ガソリンにいつ引火するかわからず、生きた心地がしなかった。とっさにシートをまいて空気を遮断し、その間に近所の民家へ消火器をかりに走り、大事はまぬがれたが脱穀機は廃品回収となってしまった。どうして田が乾かなかったのでしょうか、誰か教えて下さい。

●ついにあぶらむ畑にイノシシが…

刈り入れ間近の田がイノシシに踏み荒らされた田ほど無惨でみじめなものはない。山に近い田畑は電線をはって自衛につとめているが莫大な費用がかかる。今年も近くがやられていた。あぶらむの里も3～4年ほど前より山手の方に出現している痕跡はあった。ミミズをねらって土を掘りくりからかすのである。それがだんだんと下の方におりてきた。警戒心の強いイノシシ、用心に用心を重ねながら少しずつ安全を確認、下の方へおりてくる



猪に踏み荒らされた近所の田。収穫は放棄された。

のがよくわかる。時間の問題かなあーとは思っていたが、10月中旬ついに畑が荒らされ、勢いづいたのか宿の建物周辺までが掘りからかされた。もうこうなったら怖いもの知らずといったところだ。先日夕方、仕事から帰ってきたら堂々と一個連隊が県道を闊歩していた。日ごろの恨みとばかりにはね殺そうと思って群れにむかってアクセルを踏み込んだが、直前で急ブレーキをかけた。やっぱりできなかった。イノシシ達は大パニ

ック、一頭があぶらむの敷地の中へ、「おーい、そっちじゃないぞー」と叫んでいる私。大豆は野ウサギ、タヌキ、イノシシにやられ、その他の野菜も野生動物のためにつくっているようなものとなってきた。今年はドングリもまったくできず山にエサとなるものが少ない受難年。町の有線放送はクマ出沒の案内ばかり。あぶらむの里への出沒もイノシシ同様時間の問題か。それにしてもあんなに沢山実っていた柿の実がアツという間に



新しくできたウッド・デッキ、小枝が自然の屋根。

消えてしまった。地面に一つも落ちてはならずどこへ消えたのか不思議で仕方ない。さては一晚でクマが食べていったか、想像できることはそれしかない。でも、恐いもの見たさで一度見てみたい…。

そんなこんな“異”つづきの事ばかりのあぶらむの里でした。どこかに大きな変化(異変)が起こっているのでしょうか。お互いにもっと真剣に私たちの旅の舞台、地球環境について考えてみたく思います。

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2010年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

2011年 子どもから大人までのネパールの旅

過去11回続けられてきたプログラムですが、諸般の事情でこの3年間中止してきましたが、2011年春再開することとなりました。

静寂なジャングルとそこにすむ野生動物との出会い、眼前にせまる神々しいまでのヒマラヤの山々。ネパールは心の安らぎと感動で一杯です。子どもから大人まで参加者全員で協力しあっての旅です。

期間2011年3月26日～4月6日(12日間)

お問い合わせはあぶらむの会へ

スペイン サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の旅

35年前、私が牧師補として最初に赴任した東京神田キリスト教会のご婦人達から、キリスト教三大聖地の一つスペイン サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼の旅の企画を依頼された。名前は聞いたことはあるが私には想像できない旅、「いつかできればいいですね」とあたりさわりのない返事をしていた。今年5月、「いつまで生返事をしているのですか、私たちには残された時間そんなにはないのです」と直談判にやって来られた。その迫力に押され「すぐに計画します」とこの秋実現のはこびとなった。参加人数8名、最年長77歳、最年少58歳、平均年齢67歳のメンバーで約5日間で114kmを歩く巡礼の旅となった。

カミーノ・デ・サンティアゴ（サンティアゴへの道）

スペイン巡礼の道は、キリスト十二使徒の一人聖ヤコブの亡骸が眠るサンティアゴ・デ・コンポステーラに詣でるために、巡礼者達が歩いた道である。伝説によれば、スペインで布教した聖ヤコブはエルサレムにもどり殉教、その亡骸は船にのせられ、風まかせの航海の末スペインのガリシア地方に流れ着いたという。そして9世紀のはじめ、この地で聖ヤコブの墓が発見されキリスト教の一大聖地、そして巡礼路として発展していった。

ヨーロッパ各地から数々の巡礼路があるが、一番多くの巡礼者をあつめるのが「フランスの道」である。フランス領ピレネー山脈のふもとから出発する道は780kmにおよぶ。巡礼の方法としては徒歩、自転車によるものが認められ、徒歩の場合はサンティアゴまで100km以上歩いた者に巡礼証明書が付与される。そんな訳で私たち8名はこの巡礼証明書を手にするためにサリヤという町を出発地として聖ヤコブの眠るサンティアゴまで114kmを約5日間で歩くことにした。

スペインの首都マドリードから入国した私たちは巡礼出発地サリヤまで約500kmをバスで移動。行けども行けども地平線まで見渡せる広大な大地。樹木は少なく収穫を終えた畑は静かに休んでいた。無数の太陽光発電用パネルがならんでいた。自然エネルギー発電世界一を誇っている。しかし、ガリシア地方に入ると一転、木々がおい茂る緑豊かな大地となった。

第1日目はサリヤーポルトマリ
ン22.5km。出発の朝は満点の星
空だった。朝8時出発といっても
まだ暗く、朝日が昇ってくるのが
10時近かった。毎日のように霜が
降りていたから気温は1～3℃、
ある程度歩いてからだが温まるま
ではけっこう寒さを覚えた。巡礼
の出発点をメルセド修道院とし、
その小礼拝堂をお借りして、参加
者最高齢の武藤主教の司式でささ
やかな出発の祈りをもった。1200
年近く数知れぬ巡礼者達によって



木にまで印されたサンティアゴへの道

歩きかためられたサンティアゴへの道、時には現代の道と並走したり交差したりしたところはあるが、その多くは中世の人々の生活を想像できるような昔のままの道だった。朝霧の中にたたずむ石造りの家、草をはむ牛や馬、石畳の道を多くの巡礼者達が黙々と歩く。ヨーロッパ各地やブラジルはじめ南米の国々、アジアは韓国が一番多かった。歩きの早い人、遅い人、しかしお互いすれちがう時「ボン・カミーノ」と声をかわす。



第一日目の巡礼宿まであと一息

(耳ではどうしてもボン・カミーノと聞こえるのだが正確には Bueno Camino ブエノ・カミーノ “良い旅を” だと思う) 「ボン・カミーノ」、いろいろな違いを超える人と人とを結びつけるいい言葉だと思った。心配していた道順も黄色の矢印が立派に案内導いてくれた。道上に、石堀に、家に、木にといたるところに記された黄色の矢印と巡礼の象徴である“ホタテ貝”が私たちをしっかりとサンティアゴへと導いてくれた。また500mごとに“ホモン”とよばれるキロ標示が設置されており、現在地とサンティアゴまで残り何キロあるかが彫られている。段々距離が減っていくホモンに出会うと当然ながら嬉しくなり、声はかけてはくれないが私たちを励ましてくれた。

一日の行程が終わると“アルベルゲ”(巡礼宿)に泊まる。お金のある人はホテルや民宿に泊まる人もいるが、私たちはあえて巡礼宿に泊まることにした。どこも二段ベッドのKayoko棚で40~50人の大部屋や10人の小じんまりとした部屋などさまざまだった。部屋割りは男女の区別なく到着した者から順番に徒歩での巡礼者が優先され、自転車組は夜7時まで宿泊できないということだった。



ホモンとよばれるサンティアゴへの一里塚

歩いて三日目だったか、割り当てられた部屋は10人部屋、我々8人の外にスペインのアンダルシア地方から来たという人2人が一緒になった。その一人は120kgほどの巨体、そのイビキのすごさときたら、この世のものではなかった。我々全員一睡もできなかった。「さすがの大郷さんのイビキも彼人にはかなわなかったね」の一言にガックリ。自分も多くの人に迷惑をかけていることを始めて知った。「イビキ世界超の人と記念写真を撮ろう」と、お互い何事もなかったかのようにハイ・ポーズ。“ボン・カミーノ”とエールをかわして別れる。しかしこの寝不足で今日一日もつのだらうかとだれもが不安だった

に違いない。それほどすさまじい一夜であった。

2日目ポルトマリナーパレス・デ・レイ25km、3日目アルスーアまで28.5km、4日目ペドロウソ19km、5日目モンテ・ド・ゴソー14.5km。

6日目最終日、遙かかなたに聖ヤコブが眠る教会の尖塔が見えるため、長い巡礼の旅をしてきた人々は互いに手を取りあって喜んだという“歓喜の丘”、そのゴソーの丘から路面に埋め込まれたサンティアゴへの道標“ホタテ貝”をたよりに古い街並みを4.5km歩くとサンティアゴ・デ・コンポステーラだ。途中で声を交わすようになった一人巡礼のドイツのご婦人は泣きながら周囲の人々と抱きあっていた。1200kmを歩いてきたという。ご主人を亡くされたの



聖ヤコブの眠るサンティアゴ・デ・コンポステーラに到着した参加者一行

だろうかと勝手に想像した。ゴールした私といえば無事に終わったという安堵はあったものの、それ以上の感慨はわかenかった。“最後の100km”といういいとこどりをした後ろめたさがあったからなのだろうか、ドイツ婦人のように1200kmとはいかないが、せめて“フランスの道”の出発点サン・ジャン・ピレネーから780kmは歩いてみたいと思った。

それにしても人は何故歩くのだろうか、私は歩きながらずっとそのことを考えていた。特に自動車道と並走するところあたりに来るとその問いが大きくなった。100kmの距離など1時間足らずで走ってしまうのに、日ごろあまり歩くことのない私、当然足に痛みが出てきた。そんな時、私の周囲で重い病気をかかえている人のことを憶えて祈った。自分の痛みにとらわれると痛みはいつまでも続いたが、他者に気持ちを向けると不思議と痛みを忘れた。これも今回の一つの発見だった。それにしてもなぜ歩くのか、私の見出しえたことは「自分との約束」ということだった。この言葉はまだ自分の中で十分に熟してはいないが、歩きながら自分の中にひらめいた事は「人生は自分との約束なのだ！」という言葉だった。自分で歩くと決めたのだから私は歩く、ただそれだけかもしれない。他者との比較でどうこうということでないことだけは確かなことだ。しかしその歩きの中で見た風景や出会った人は、私の中でまた新たな私をつくってくれているように思えてならない。サンティアゴへの黄色の矢印やホタテ貝の道標といい、一歩一歩ただひたすら歩く姿といい、今回の巡礼の旅は“旅人の宿”を標榜にするあぶらむと私にとって新たな歩みと気づきを与えてくれたと思っている。

「巡礼の心構え」－「サンティアゴ巡礼は長い旅であり、巡礼とは人生のようなものです。巡礼の『巡』とは巡り合わせです。全ては巡り合わせ、たとえ不本意な出来事があっても、受け入れること＝許すことで、また新たな何かに巡り合うことができるのです」。

この一文が自分の中に根付くためにもしっかりと歩いて行きたい。

少年の旅立ち、私への手紙

—家庭裁判所補導委託事業とあぶらむ—

2004年に始まった家裁少年の補導委託事業も6年余の月日を重ねた。6ヵ月間の補導委託期間中、少年と私たちとの間でいろいろ山坂谷を越えることは多々あったが、12番目の少年まで無事に送り出してきた。しかし、その実績にあぐらをかいていた訳ではないが13番目の少年は委託中止となった。私たちの力不足を痛感させられた。

ここあぶらむの里での共同生活は信頼関係の上に成り立っている。私は性格的にあれこれ規則を設けることは好きではない。規則などない方がいい。人生は自分との約束、規則だからやるのではなく、自分との約束事においてやるもの、やらないことと思っている。しかし、時として少年達との生活の中で通じなくなることがある。「バレなければよい、気づかれなければよい」というささやきがいつかここでの生活を破綻させ、個人の心まで蝕んでしまう。もし今後もこの補導委託の仕事を続けるなら、少年達の心にそのようなささやきが入り込まないようにもっと手厚い配慮を考えなければと思う。

少年と私とはジイ孫の年齢差、中間にお兄さん役のスタッフがいてくれればと願うのだが、そのために専任スタッフをやとう経済的余裕などなく、不要な箱物ばかりに補助金を出している行政に対してごまめのハギシリをしているばかりである。そんな中、新しく旅立っていた少年が私に手紙を書いていつてくれた。私にとっては大きな力づけだった。これを手がかりにこれからの少年達との心にむかいあって行きたく思っている。

大郷博先生へ

あぶらむでの自分との格闘

S・R

下手で意味の分からない部分があると思いますが最後まで読んで下さい。
僕は、11月20日に先輩をリンチにした傷害事件で警察に身柄を拘束されました。俺は、人を傷付けることで捕まるとは夢にもおもっていませんでした。捕まったとき「自分は何でこんな所に拘束されているんだ？」という疑問しかなく、聞かれたことだけに答えてただ時間が過ぎていくのを待つだけでした。だけど「お前は人を殺しかけたんだぞ。」って言われてから何かものすごく怖くなりました…。その時にはじめて自分の犯した罪の重さを知りました。でも、今まで他にも傷を負わせていた人がいたのに、自分も傷つけられた事があったのに何故今さら捕まって、何故俺を傷つけた奴らが捕まらなかったか不思議でしょうがありませんでした。今回、僕が傷を負わせてしまった人も「不良」という部類に入っていると思います。なのに何故たった一回のことで捕まったのが自分の中で理解が出来ずにいました。警察に拘束されてから一週間たったくらいに、日弁護士が俺の担当の人となりいろんな話を聞きました。被害者の人の状態、ばあちゃんの事など。ずっといろんなことを考えていた時に弁護士さんが「君がしたことは人の身体を傷つけるだけじゃなく人の心や相手の家族がとても悲しむ事をした。もし君がされたらどうだい？親はどう思う？一度しっかり考えなさい。」捕まってから始めて怒られた人でとてもうれしかった。親父は、怒っているのか怒ってないのかよくわからない感じだった。弁護士さんは本当に怒ってくれてるんだって感じで

とてもうれしかったし反面かなしかった。親父はしっかりと怒ってくれない、見捨てられたんだなって思った。審判の判決で少年鑑別所に行き少したつぐらいい、まったく反省していない俺に親父が怒った。やっと、やっと怒ってくれた。今までにない安心感があつた。それから調査官の人とも話ながら「あぶらむの里」という家があると教えてもらい俺はすぐに「行きたいです」と答えた。

その時の理由はたった1つだけでした。

少年院だけは、行きたくないという理由だけだったので正直やりぬけると思わなかったし、半年間ダラダラ過ごせばいいという考えしかありませんでした。12月24日「あぶらむ」にはじめて来てまず雪の量にはおどろきました。これもはじめて見たもので、その時の「オッ」という感じは忘れられません。家の中に入って先生が居て第一印象は優しそうで穏やかな人だなんて印象でした。最初だけでしたけど…。たくさんの方が居て誰かが「君はあぶらむへのクリスマスプレゼントだね。」って言った時はものすごくうれしかった分何で犯罪を犯して来た俺がクリスマスプレゼントなんだっていう疑いの部分もありました。でも、みんなと過ごしていくうちに俺を犯罪者としてじゃなく一人の人間として見てくれていて、その時にはじめてあぶらむに来て良かったと思いました。

それから仕事なども覚えなければいけないし、自分はどうしたら更正できるのかなどいろいろな事を考えながら生活しなきゃいけなかったのももう無理、少年院の方が楽だと思つた時が数えきれないくらいありました。まず更正という意味が理解出来ず悩みました。今までの自分を振り返り立ち直ると、祥子さんと成さんにいわれたけど今までの自分をどう治していけばいいかわかりませんでした。俺は、タバコも吸ってたし、窃盗もしたし、たまにケンカなどもしたけどタバコは売るのが悪い。窃盗は盗られるのが悪い、ケンカはやられるのが悪い。あぶらむに来て成さんが誰かと話して「もし、自分がやられたらどう」と言われた時、俺は何か盗られたらやり返す、ケンカでやられてもやり返す。自分が言っている考えとやっていることは矛盾していると言われて初めて気付きました。今、考えるととても恥ずかしいと思う。それに気付けたのはあぶらむに来たからです。更正とは、今までの自分の生き方が一般社会の人とどう違い、今までの自分はどこがズレしていたのかに気づき自分は、どんな事をして、どんな人との関わりが大事か？自分に必要な環境はどんな所かを自分で考えそれをいろいろな人に質問しながら自分でも考え、実行していろいろな人の信頼を得ている人が認めてくれた時はじめて更正したって思うんじゃないかなと思います。だから俺は、いろいろな人から信頼される大人に一歩ずつ進んでいこうと思います。

2月26日、Sが来た日です。俺は、Sと居る時が一番楽しくて楽しくてしょうがありませんでした。一番の思い出は富山まで76km歩いたことです。歩いている時もくだらない話をしたり、意味もなく話かけたり本当にあの時は楽しかったと心の底から言えるほど楽しかったです。でも、歩いた次の日、タバコが発覚してみんなが忠告や、先生の「バレなければいいと思うやつはクズ」と言っていた言葉の重みにまったく気付かなかつたです。もし、あの時に発覚しなければ吸い続けていました。だから俺は見つかつてよかったと思いました。Sは、いなくなつてしまつたけど俺は、タバコの件で自分のやましい部分を全て出せて良かったと心底思います。でも、先生達の信頼を全て踏みにじつてしまつた事は本当に悪いことをしたと思いました。すいませんでした。あの後から少しでも信頼が1%でも戻っていたらう

れしいの一言です。

話は変わりますが、先生に「家族とは何か？」って言う質問されたことがありますが、最後まで考えましたが自分の力では分かりませんでした。だからこれからの人生の課題としておきます。自分の家族をもしつくれたらその時、自分の中で考えた「家族」というものを築きあげていきたいと思います。

長いようで短かった9ヶ月間いろんな人との出会いがあり、いろんな出来事がありました。今はそれが全部思い出です。

先生はすごいキビシくて「何だ！！」って思うときは度々ありましたがそれも思い出です。本当に長い間お世話になりました。

P.S 来年の立教小学校と自然学校は手伝えたら来たいと思います。

『子どもたちをあぶらむに連れて行くわけ』

立教小学校教諭 西村 正和

私の勤める立教小学校では、2004年からグローバルエクスカージョンという野外体験プログラムを5年生を対象に始めました。これは、「人と自然とがともにある喜びを体験する」「五感を使い、見たり聞いたり感じたりすることを楽しむ」等をねらいとしたもので、子どもたちは、北海道・小笠原・飛騨高山・四万十・沖縄などのコースの中から自分の行きたい場所を選びます。これまでにこのコースに参加した児童は97人。引率という形であぶらむを体験した教員は、私を含めて9人ということになります。

あぶらむでは、次のようなプログラムが行われます。

1日目 オリエンテーション、大郷先生の話 2日目 ピザ作り、Tシャツ作り、肝試し
3日目 滝遊び、ナイトハイク(26キロ) 4日目 ジャガイモ掘り、料理作り
5日目 川遊び、四十八滝温泉 6日目 帰京

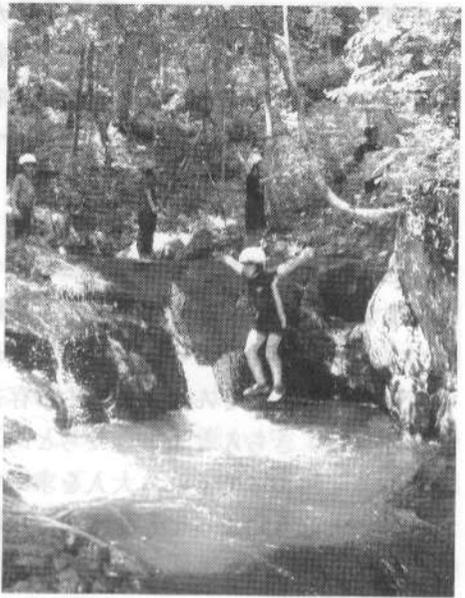
またプログラムには書かれていないペローダ(工事車両)による敷地めぐりや虫取り、ツリーハウスやヨットでの宿泊なども、子どもたちにとって心に残る体験になっているようです。

しかし、はじめから全てが順調だったわけではありません。実はこのプログラムの意味を問われる出来事が、はじめの年に起こりました。人呼んで「トマト事件」。それは国道近くの宮川で、川下りをしていた時のことでした。ふと見ると、泡だった川の流れの中にいくつかのトマトが流れていました。その時私は「日本一の清流、四万十川」や「青い空、青い海の小笠原」…といった他コースのうたい文句を思い出し、夜のミーティングで、「グローバルエクスカージョンが豊かな自然を体験することをねらいにしている以上、もう少しきれいな川に行くことは出来ないか」ということを発言をしたのです。すると、それに対して大郷先生をはじめ、その場にいたサポートの大学生からも一斉に反発の声が挙がりました。「豊かな自然とは何か。コマーシャルに出てくるような澄んだ水のことを言っているのか。あれが人間と共存している川の実態であり、鮎釣りをしていたということは、水も十分きれいだということではないか。都会の教員の勉強不足。自然体験を通して子どもたちの何を育て

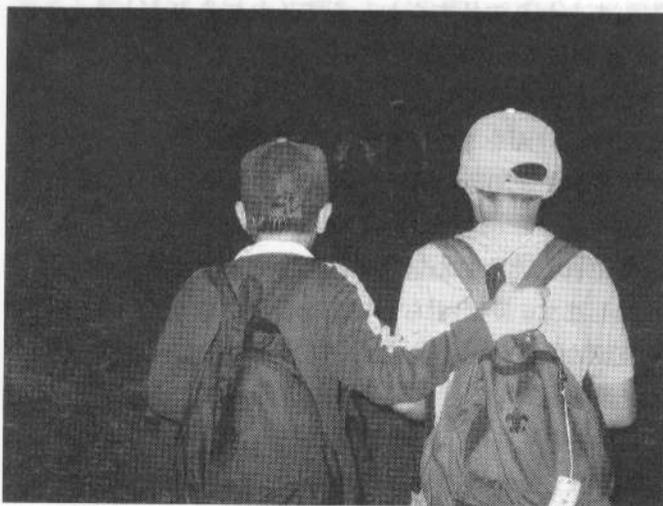
ようとしているのか、あぶらむコースのねらいは何か…。」それは、大学以来何度も問われてきた「今、ここで大事なことは何か」という問いでした。私はいきなりピンチに立たされましたが、そのミーティングによって、あぶらむに期待していることは、身近な自然の中で子どもたちが遊びきるということ、そしてそこで起こる価値観の揺さぶりなのだということを変更して確認することができました。

火起こし、虫取り、滝遊び…。あぶらむでは、子どもがワクワクする場面がたくさんあります。朝礼で、野外料理でと何度も火を起こすチャンスがあり、虫取りが好きな子は、こっそり教えてもらった秘密のスポットに勇んで出かけていきます。滝遊びでは、はじめは怖くて尻込みしていた子も、仲間やスタッフに励まされ勇気を出してジャンプ！いつしかその楽しさに夢中になっていきます。普段の学校行事であれば、時間や人数の関係で「1回やったら交代」「時間がないのでここまで」といった制約がついてまわりますが、あぶらむでは、たっぷり時間をとって何度でも挑戦できるところが魅力です。

そんな楽しいあぶらむのプログラムの中でもナイトハイクは一番のハイライトで、まさに五感を使って豊かな自然を思いっきり体験するプログラムだと言えるでしょう。子どもたちにとって、26キロを歩くことはそれだけで大きな挑戦ですが、それが夜に行われることは、このハイクの意味を何倍にもしてくれます。足元の悪い夜の道。子どもたちは、月明かりを頼りに山道を歩く中で、改めて光の有難さを知ります。そして声をかけあい、支えあう中で改めて仲間の有り難さを知ります。寝ながら歩く子、泣きながら歩く子…ゴールまでの道のりは毎年大変ですが、終わってみれば、何かをやり遂げた達成感は大きく、子どもたちは



滝飛び込みはスリル満点！



暗くても仲間がいれば大丈夫

一回り大きく成長します。暗闇の中、仲間とともに26キロを歩き切った経験は、この先辛いことや大変なことがあった時にも、きっと子どもたちの中で、一つの拠り所になってくれることでしょう。また、あぶらむの生活の中では、「危険」との付き合い方も学びます。現代の私たちの生活は、とかく危険なことを遠ざけることばかりを考えがちですが、あぶらむは「危険だからと言ってそれを避けていては、いつまでも危険と向き合う

力は育たない。大切なのは、何が危険かを知り、それをどう乗り越えていくかということ。」というのがスタンス。薪割りでは斧の安全な使い方を教わり、ナイトハイクでは、崖から落ちないように山側を歩くことが何度も確認されます。「ポイントを抑えてしっかり準備をすれば、危険は向こうから逃げていく。でも、気を緩めていい加減なことをすると、事故というものはあつという間にやってくる」。これもあぶらむのプログラムを支える、大事な考え方の一つです。

そして当然のことながら、あぶらむでのエクスカージョンに欠かせないのが大郷先生の存在です。きまりや規制で子どもたちを縛らない。既成概念にとらわれず、ユーモアがいっぱい。頑張った時はちゃんと褒めてくれるし、いけないことをした時や危険な時はきちんと注意してくれる。そんな大郷先生の存在は、子どもたちにとって絶対的です。それは別の見方をすれば、きちんと子どもたちと向き合う大人がいるということ。子どもたちは、本音で話し本気で関わってくれる大人を求めているのです。だから子どもたちはみんな、大郷先生のことが大好きになってしまうのではないかと思います。

身近な自然の中で遊びきる体験、そしてそこで起こる価値観の揺さぶりを大事にしながら続けてきたあぶらむでのプログラム。一回の体験が人生を大きく変えることはないかもしれませんが、あぶらむで感じたこと、考えたことを大事にしながら、子どもたちがそれをどこかでこれからの生き方に繋げてくれれば、こんなに嬉しいことはありません。そんな願いを込めながら、最後にこれまで参加した子どもたちが書いた俳句や詩をご紹介します。

俳句「なべかこみ ゆげのむこうに とものかお」(2004年S A君)

「あぶらむで あと十年間 くらしたい」(2006年T H君)

「あぶらむは 自然のめぐみの 宝箱」(2007年K H君)

「がんばれば なんでもできる あぶらむは」(2009年K N君)

詩『ありがとう』(2007年Y T君)

大郷先生ありがとう 火の起こし方やまきわりの仕方をおしえてくれてありがとう

「男とは」の話聞かせてくれてありがとう 楽しい時間をありがとう

スタッフのひとたちありがとう おいしい料理を作ってくれてありがとう

先生ありがとう 山のぼりのきちょうなけいけんをさせてくれてありがとう

いろいろなきかくでほくらを楽しませてくれてありがとう。

あぶらむの体験をしっかり受け止めてくれたこうした言葉に出会うと、子どもたちを連れて行ってよかったという気持ちを新たにします。いたずらな笑顔を浮かべながら「70歳までは頑張るよ!」と豪語する大郷先生を支えながら、これからも子どもたちとあぶらむをつなぐ橋渡しの役割を担っていければと願っています。

韓国一周鉄馬の旅

●私とオートバイ

私の子どものころのあこがれは西部劇のカーボーイだった。

たき火にあたり野宿するシーンなら真似ができると毛布一枚で寝て寒い思いをした。馬での旅なんて遠い遠いあこがれでしかない。でも現代の馬、鉄馬なら身近にある。いつしか鉄馬での旅へと夢がふくらんでいった。

私が中学生のころ、我家の荷物運搬は自転車で引く「リヤカー」だった。デパートへの納品などはもっぱら私の仕事、からだのきつきよりも自動車にまじってリヤカーを引くことのかっこ悪さの方が苦痛だった。次に登場してきたのがオートバイ、からだはうんと楽になったがオートバイで引くリヤカーはもっとかっこ悪かった。4歳年上の兄が家業の見習いで家にいなくなった時、そのオートバイの運転は私の役割だった。60歳過ぎの父は運転できず、そのため私は親公認の「無免許運転」で家を手伝った。無免許運転で家庭裁判所送致が2度、警察署での始末書は数知れず、「無免許」という漢字が書けなかった私に、「字も書けないのに乗っているのか」といった老お巡りさんの言葉を今もはっきりと憶えている。

私もそろそろ「前期高齢者」と分類される年になった。「年金がたまっているよ」と女房、「何に使うかなあー」と私。「何いってんのよ、それは葬式費用でしょ」との一言に私の脳線がブツチンと切れた。「そんな後ろ向きの金はいらぬ」と私は「ボケ防止」を兼ねてそれでオートバイを始めることにした。「年金バイク」の誕生である。そしてこの初夏、現代の馬アイアン・ホースにまたがり私は卒業生の加倉井君と二人で韓国一周の旅に出かけた。

●韓国ってこんなに近かったのだ

5月30日午後8時、私たちの国際フェリーは釜山に向け下関を出航した。船内は日本人はまばら、韓国人パワーに圧倒されながら風呂に入り夕食を済ませ、少し眠ったかなあーと思ったらガラガラと錨をおろす音で目が覚める。午前3時、船は釜山に着き沖待ちをしていた。遠いと思っていた隣国韓国まで7時間あまり。ちなみに福岡博多からの高速船なら片道2時間40分、料金は往復で1万円とあったのには驚いた。もっと遠い国だと思っていたのだが、地理的にはすぐ手の届くところにある国だったのだ。

宮崎県での口蹄疫真最中ということもあり、車輛の汚れには神経をとがらせていた。オートバイ組は手荷物検査など厳しいときいていたが、何と入国審査室に私たちを出迎えに来ていたシスター（修道女）が入ってきていた。「この人は日本のシブニー（牧師さんだよ）」という一



シスター、お似合いですヨ。

言で荷物はフリーパス。何よりも一般人の立ち入りが厳しく制限されているところに入ってこれるということに驚いた。

韓国では宗教者は尊敬され大切にされていることを、その後も数々の場面で知った。私は何もやましいことはなかったが、隅々まで検査されることのわずらわしさがなくなっただけで安堵した。シスター様々、気分の良い韓国第一歩となった。

●釜山（プサン）からソウルへ

言葉もわからず道もわからないままの韓国一周鉄馬の旅、私たちを出迎えに来ていたシスターや釜山教区の牧師、そして僧侶の法明さん達と10日間の日程でのコース取りを相談した。お互いこれで大丈夫なのかと心配だったに違いない。なるべく海沿いを走ることに決め、多島海の入口 馬山（マサン）まで私たちを先導してくれた。

別れた後はいよいよ私たち二人だけの旅、不安ではあったが反面これほどの解放感はなかった。それこそ足の向くまま気の向くまま、大きな目標とする町はあるもののその間には全くのフリーである。おいしそうな食堂があれば腹を満たし、暗くなれば宿を探す。不安の中にも最高の解放感を味わわせてもらった。韓国南部は農繁期の真最中だった。麦やニンニクの収穫の真盛り、側で田植え、人が大地にしっかりと根ざして生きている様がピンピンと伝わってきた。わたしたちはまず「朝鮮の役」の際、豊臣秀吉の軍が最初に上陸した莞島（ワンドウ）、天童よしみの“海が割れるのよー”で有名になった珍島（ジンドウ）を目指した。ワンドウには高さ20mはあろうかと思われる救国の將軍 李 舜臣（イ・スンシン）の巨大な像が遙か日本をにらみつけるかのようにそそり立っていた。猜疑心の強かった秀吉、兵士の働きを見定めるために殺した朝鮮軍兵士の耳を切り落とし塩漬けにして京都まで運ばせたという話を思い出した。心なしか韓国の人々の視線が厳しく感じられた。

珍道には“モーセの奇跡、海割れの地”と英語の案内があった。年に一度3月の大潮の時海が開け、対岸の島まで地続きとなって数万人の人々が渡るといふ。その光景写真が展示されていた。しかしそれ以外の時はただ海に浮かぶ小島でしかなかった。その光景を想像するだけでよしとしたいものだ。

私はどうしても木浦（モッポ）という町を通りたかった。昔、天気図をつけていた時、韓国を代表するのがこのモッポだった。たったそれだけのことなのだが、私の中ではこの町が一番親しみやすいものとなっていた。木浦の次が例の光州事件のあった町クワンジュである。事件関係者の霊にお参りしようと思ったがあまりにも大きな街、私たちの能力ではその場所を探し出すことは無理、迷子になるのが関の山だった。

韓国の道路整備は世界でもトップ



ニンニクの収穫期、トラックに元気満載。

クラスと思った。オートバイは高速道路通行禁止である。走れるのは一般道だけ。その一般国道が日本の高速道路なんか目じゃないほど立派に整備されており広いところは片側5車線もあった。現在も北朝鮮とは休戦中の韓国、いざ有事という時には飛行機の発着場にもなると思うが、いずれにしても道路の立派さには目を見張らされた。

そしてまた道路標識が完璧であった。道もわからずハングル文字も読めない私たちが大きな迷いもなく一周できたのはこの整備された道路標識にあった。旅における道しるべの大切さを改めて強く実感させられた。

●ソウルの街で

天安（チョナン）にある独立記念館を訪ね、韓国と日本の間の不幸な歴史を再認識した後、この旅最大の難関ソウル市内に向かった。ソウル市内は交通量といいスピードといい、割り込みの激しさといいはんばではなかった。私が東京へ出てきた東京オリンピックの時のようだった。そのような中、道もわからずウロウロしながら走るということは危険きわまりなかった。韓国の友人、知人がいろいろとサポートしてくれた。

道案内の先導者の後ろにつくと、割り込みの激しい中で、その車を見失わないようにとその車のナンバーしか視野に入らなくなってしまった。私たちが先導してくれたオーさんの車輛ナンバーは4438、私の目は点になりこの4438の数字以外何も目に入らなかった。自分で道を探し求めていた時は全ての景色が鮮明に今も脳裏に焼きついているのに、ソウルの景色はこの車輛ナンバーだけである。確かにその車の後について行けば目的地までは担保される。ありがたいといえばこんなありがたい事はない。後につき従って行くだけで特別何もしなくてもよいのだから。しかし、終わってみればソウル市内の景色は何一つ残っていない。これって現代社会そのものを物語っているのではないだろうか。先導車を見失わないようにと必死になって点だけを見ている私たち。自分で道を探し求め、見出していく力があればもっと周囲の景色を楽しめる。そして、私たちをとり囲む景色はもっと広く、美しく、多様性に富んでいることに気づく。人生は4438だけではない、もっと自分の足で旅しなければならないことを強く教えられた一時だった。

●ソウルから東海へ、そして38度線

韓国は東西200～300km、南北600～700km、一般国道の法定速度は80kmだから、ただ走るだけであれば4～5時間もあれば横断してしまう。ソウルを朝出発した私たち、お昼にはもうそこは日本海（韓国の人はこの海をニホン海とはよばず東海（トンヘ）と呼ぶ）、寒流のせい6月というのに肌寒かった。草束（ソクチョ）は大きな漁村、そこで世界一おいしい刺身をご馳走したいと、さくら道250kmを完走したオーさんが私たちを待ち受けていた。出てきたのは大きなドンブリに山盛りされたヒラメ、これで二人前という。高級魚ヒラメは薄造りで食べるものと思っている私なのに、マグロのブツ切りのような造りになっている。かんでいるうちに魚の臭みがでてきてしまうのにはおいしさも半減。彼らはこのブツ切りにコチュジャン（からし味噌）をかけて食べる。食べても食べてもドンブリの底からヒラメが出てくる。腹一杯、胸一杯、ニオイ一杯、最後は拷問に近くなってきた。（オーさんゴメンナサイ）

夜はオーさんのなじみの民宿で、漁師から直接買った大ゴコを食べる。食べても食べてもタコ。韓国の人はどうして単品物を沢山食べるのだろうか不思議に思った。私はお礼に持参していたラッパのマウスピースで「リアン」を吹いた。その家のオヤジさん大感激、焼酎の勢いも加わり、その夜は韓日大歌合戦となった。こんな草の根のよっばらい交流もいいものと思った。



よっばらいの草の根交流、韓日大歌合戦

朝になって驚いた。その辺一体の海岸線はどこまでも果てしなく続く鉄条網で海と陸が遮断されていた。北のスパイの潜入を防ぐためだった。4~5kmごとに検問体制のしかれた浜への出入り口があるという。自分の家の前浜まで出るのに一大仕事、そこには無限の隔りがあった。北と南を隔てる38度線、国連監視の非武装地帯へはオートバイの乗り入れは出来ないことは知っていたが、行けるところまで行ってみることにした(乗用車はOK)。海岸線には果てしなく続く鉄条網、道路にはいたるところ人口のトンネルや重さ8~10トンはあるかと思われる巨大なコンクリートブロックが両側に積まれていた。これらの全てに爆薬が仕掛けられており、北からの侵攻があった時道路を遮断するのである。38度線近くの検問所で通行を止められた。兵士はとっても親切で、せっかく日本から訪ねてきたのにゴメンナサイといったニュアンスの言葉で私たちを帰した。せめて記念写真でもとねだったがそれも禁止された。

その日、私たちは一気に慶州(キョンジュ)まで450kmを南下することにした。南北の境界線38度線から東海市まで約300km、国道7号線は海岸近くを走っているが、その間は切れることのない例の鉄条網だった。東海市から慶州までは新しくできた道となり、海岸から山の中に入ったから鉄条網の所在は確認できなかった。この鉄条網はどこまで続くのだろうか、そしていつまで続くのだろうか。私にはこの旅で一番心に残る光景だった。

総走行距離3478km、韓国内走行距離2090km、風を感じ、温度を感じ、ニオイを感じ、一つ一つ道を探し求めながら韓国の人々の生活の一部面を肌で触れる鉄馬の旅だった。



300km余も続いていた鉄条網



38度線近く、道路封鎖用の巨大ブロック

あんなこと そしてこんなこと

あんなこと (2010年主な報告事項)

●あぶらむガヴィス基金

本年度支援先

・草の根NGO「アジア子どもの夢」

代表 川渕 映子 (富山県) 継続

活動内容 ベトナム戦争枯れ葉剤被害児自立支援

・コーディネラ・グリーン・ネットワーク

代表 反町真理子 (フィリピン) 継続

活動内容 フィリピン カリンガ州立大学に学ぶ5名の学生への奨学金

●家庭裁判所少年補導委託事業

受け入れ少年 3名

委託期間終了 (送り出し) 少年 2名

委託中止少年 1名

2010年度 6家庭裁判所と補導委託契約を結ぶ

(岐阜、神戸、大津、名古屋、津、富山)

こんなこと (2011年の主な行事予定)

●あぶらむ雪祭り (冬期自然学校兼ねる)

1月8日～2月28日までの土・日・祭日。(尚、沖縄からの雪祭り訪問団は1月8日～10日です)

●第12回子どもから大人までのネパールの旅 (再開)

期間2011年3月26日～4月6日

●あぶらむ夏期自然学校

8月5日～10月 (予定)

●あぶらむツリークライミング指導者養成講座

日程も含めて現在検討中。ロープ1本でのツリークライミングに関心のある方はお問い合わせ下さい。

●野麦峠103kmウォーキング

信州奈良井宿から野麦峠を越え、あぶらむの里までの103kmを5日間で歩くステージウォーキング、現在計画準備中。関心のある方はお問い合わせ下さい。

●2011年あぶらむコンサート

・津軽三味線 二代目 高橋竹山

5月28日 (土)

・上方落語 三代目 桂歌之助 落語会

8月27日 (土)

・ウエイノ、フォルクローレ「アンデスの風」コンサート 10月8日 (土)

2010年 あぶらむこの一年

- 1月・暮れから正月にけっこうな雪が降る、久しぶりに雪降りの元旦を迎える。
- ・4日、早々に屋根の雪おろし、これまでで一番重い雪
 - ・9日～11日 沖縄からの雪遊び訪問団。今年は雪の心配なし
 - ・あぶらむ男子全員で猪臥山（1530m）冬山登山。
 - ・屋根の雪おろし毎日のように続く
- 2月・11日～14日 沖縄雪遊び訪問団第2陣
- ・22日 家裁少年審判（11人目）、ひき続きあぶらむで生活することになる。
 - ・26日 家裁少年（13人目）受け入れ
- 3月・13日 今年も春を迎えることの喜び「春一番の会」
- ・21日 猪臥山雪上ウォーキング参加者 11名
 - ・（ネパールキャンプ、沖縄キャンプいずれも実施できず）
- 4月・沖縄愛楽園訪問（鬼本先生最後の礼拝）
- ・JA 岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
 - ・第17回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋—金沢250km）参加者114名
 - ・家裁少年間のトラブル発生
 - ・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
- 5月・田植準備開始、トラクター使用不能となり新しい中古トラクターを買う
- ・家裁少年二人、富山まで76km 歩く（20時間）
 - ・13番目の家裁少年補導委託中止
 - ・22日 田植え
 - ・沖縄県人会
 - ・韓国一周鉄馬の旅出発（5月29日～6月10日）
- 6月・富山までのサイクリング（参加者5名）
- ・自力整体整食ワークショップ（参加者7名）
- 7月・2日～5日 沖縄にて講演会、愛楽園訪問。
- ・ウッドデッキづくり開始
 - ・17日 梅雨明け、ウッドデッキ完成。猛暑が始まる。
 - ・愛知聖ルカ教会キャンプ
 - ・立教小学校あぶらむの里キャンプ（参加者10名）
- 8月・あぶらむ夏期自然学校（5泊6日 参加者9名）
- ・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿研修会
 - ・芦屋聖マルコ教会教会学校キャンプ
 - ・第3回 桂歌之助落語会
 - ・あぶらむツーリング・クラブ 第1回ツーリング
- 9月・5日 この夏一番の暑さを記録する
- ・家裁少年審判、親元へ帰る（12人目）
 - ・25日 稲刈り 田の乾き最悪
 - ・30日 沼田用のタイヤをつけて稲刈りを試みるが全く菌がたたず

- 10月・夕方、あぶらむの里前県道にイノシシ現る
 ・8日 手刈りでやっと稲刈り全部終了する
 ・9日 第3回ウエイノ「アンデスの風」コンサート
 ・11日 脱穀開始、途中で脱穀機炎上する。
 ・スペイン・サンティアゴ巡礼の旅（14日～25日 参加者8名）
 ・家裁少年（14人目）受け入れる
 11月・逝去者記念式
 ・6日 「現代フランスの香り」ニコラ・パロニエ、トランペットとピアノコンサート
 ・韓国正農会日本有機農業視察団来里（17名）
 ・17日 初霜、例年より10日以上遅い
 ・冬用野菜収穫、越冬準備開始
 12月・あぶらむ通信発送
 ・あぶらむクリスマス会

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

■■■■■■■■ 寄付者一覧（'09年12月14日～'10年12月3日） 敬称略 ■■■■■■■■

齊藤和子／吉川恵子／鈴木信子／小野田恵子／佐瀬京子／味岡努・敏江／佃寿子／森田トミ／榎山博・逸子／木下春子／菅原美穂子／山崎俊樹／尾崎和廣／財満研三郎・由美子／塩田純子／豊見城聖マルコ保育園／山岸勇一郎・悦子／大八木米子／高田建夫・智子／鈴木武次／八木克道／山田日出夫／レーマン・ジーン／上田英子／石原つや子／野崎久／中島務／遠山章夫・秀子／静谷英夫／俵里英子／松居勲／宮本真紀／矢後和彦・正子／南知子／須間栄津子／瀬木貞子／松戸聖パウロ教会有志／新家恵子／吉植よし子／北山和民／矢崎ふき子／長野純吉・紀子／安藤隆年／千葉復活教会／松本昌子／赤尾昌人／岸村信治／高木暢子／金子美弥子／長谷幸雄／金城由美子／小島正則／東京聖三一教会／加納厚／本間太樹／鈴木育三／市川秀一／伊藤浩子／梶原恵理子／前田康雄／高瀬留美／畑井正春／市川聖マリヤ教会／佐藤敏子／富山聖マリヤ教会／宮崎なを／太田勝博／山田益男／中部学院大学宗教委員会／池崎純一／大橋雅子／笹部昭博／岡田賛三／宮古聖ヤコブ教会／溝際庸介／松村昭子／福岡女学院中学校・高等学校／雨宮寿子／牛腸とも／横浜聖クリストファー教会／安達宏昭・真理子／根本四郎／小池典昭／静岡聖ペテロ教会／南川恵津子／青柳真智子／湊治郎／山口泰生／東京セントポールライオンズクラブ／島袋洋子／加藤寛／遠藤みね雄／清水和昌／園部秀敏／谷章子／鶴川雅行／谷市三／久保田豊／長谷川牧子／伊藤幸史／入野豊／坂本吉弘／宮城正男・正子従兄会一同／永井深雪／前田晃・広世／松岡和夫／前田晃伸・容子／窪田暁子／澤武子／畑野榮一・寿子／芦屋聖マルコ教会教会学校一同／愛知聖ルカ教会／長縄年延／加倉井誠／比屋根るり子／大槻カズ子／渡辺信子／星野八千代／清水秀明・美保子／甲斐義孝・芳子／池田正毅／根本利子／福島聖ステパノ教会／渡辺洋一／長谷川秀司

サンティアゴ巡礼の旅人
 鈴木恵美子：絵

||||||| ガヴィス基金 ('09年12月14日～'10年12月3日) ||||||

榎原富美/上田敏明/竹村真紀

||||||| 2010年会費納入者一覧 ('09年12月14日～'10年12月3日) ||||||

相沢牧人/朝比奈誼/朝比奈時子/穴井悦子/味岡努・敏江/新垣タケ子/荒井優仁・彩月/赤松道子/安達宏昭・真理子/飯田孝太郎/岩坪哲哉/岩坪瑞枝/石井正郎/石井光子/糸数宝善/糸数敦子/一柳百/伊東日出子/岩元裕美/伊藤文雄・宜子/岩澤満・喜美/石崎東人/石崎奈生美/鶴川久・貴子/梅沢雪子/内田孝/上田敏明/江州良秀/小野翠/小野裕/大八木米子/大房健樹/大城恵子/小川卓/大橋雅子/小川智子/川口弘二/川上玲子/大槻カズ子/唐木田麻起子/笠井正志/加倉井誠/川満一彦・すわ子/笠原雅子/岸井孝司・ミツ子/鬼本照男/栗山盛雄/栗山洋子/黒田則子/竹村真紀/小泉恵子/近藤弘・道子/小池典昭/河野裕道/小池直子/小嶋泰子/小柳證/三瓶富子/澤野弥生/斎田美代子/佐藤芳子/櫻井智則/佐々木国夫・紀久江/笹岡淳也/佐藤哲典/清水幸平/渋谷ミカエル教会/志村弘子/渋谷一郎/下田英一・由香/城下彰/柴原薫/島文子/渋谷真理/杉浦幸恵・めぐみ/杉村進/鈴木康邦・知子/杉本良平・和子/鈴木真喜子/鈴木康仁/仙敷正俊/高瀬留美/高橋保/棚橋忍/棚橋美江/田口清吾/竹中浩/竹内元章/俵里英子/丹安紀子/田中孝子/高田建夫・智子/武原正明/高濱友理江/瀧口弘道/瀧口和子/筑井宏子/佃寿子/寺谷恵美子/泊哲次/桃源松五郎/富永隆史・敦子/時高照子/外村民彦/直井雅子/中台哲夫・信子/中山美世子/長坂尚/西垣正子/西村正和・未帆/西間木美恵子/西口晃/西口喜久枝/野田修助・和子/畑野菜一・寿子/畑井正春/長谷川秀司/土師晴子/畑中幸次郎/原田道一/浜村さとみ/比嘉良侑・政子/平野幸男/日野忠一・静子/日根野慶一/古市進/福田桂/福田亜矢子/福田一太/深田淳夫・馨子/星野一朗/松居勲/前田眞智子/丸山恒/松田捷朗/又吉亀次/升本啓二郎/前田晃伸/前田容子/丸山千早/前田晃/前田広世/三原エイ/宮田洋子/宮城正男・正子/宮脇加代子/室岡鉄夫・恵/宗像和雄/宗像千代子/武藤六治/森田トミ/百井幸子/森田喜之/山田益男/山里ツル/柳原信/山田日出夫/山内寿美子/山本岳/八木克道/保井亮/山崎美貴子/山口泰生/吉植よし子/吉野康/吉野美智子/渡辺洋一/永井深雪/川上美砂/山本眞/上村誠/岡野峻/大杉匡弘

||||||| 新規会員 ('09年12月14日～'10年12月3日) ||||||

甘木大己/伊藤浩子/伊藤幸史/国津進/齊藤寛明/齊藤美登里/佐藤耕一/鈴木正士/鈴木裕子/西村斐佐代/藤本雅明/松井尚子/宮崎なを/米澤亮子/作田真知子/田部博文・あさ子/干場恵子/河合由美子